



Title	複数形の歴史に向けて：戦後日本の思想空間における歴史記述と実践をめぐる葛藤
Author(s)	花森, 重行
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49437
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	はな もり しげ ゆき 花 森 重 行
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 2 4 2 4 号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	複数形の歴史に向けて一戦後日本の思想空間における歴史記述と実践を めぐる葛藤一
論文審査委員	(主査) 准教授 富山 一郎 (副査) 教授 杉原 達 教授 川村 邦光

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、戦後における歴史意識を考察する思想史研究である。そこでの基本的な視座は、戦後思想を戦中体験の思想化と見なすことであり、1950年代においてこの戦中体験がいかなる歴史への問いとして浮上してくるかという点に、全体の課題が定められている。構成は、序章と終章を含め、全部で八章構成となっている。

まず序章においては、近年の孫歌をはじめとする竹内好論、あるいは吉本隆明、谷川雁らの丸山真男論を検討するなかで、学問分野としての歴史学の問題に限定することなく、文学、評論、人類学、政治学を横断する問いとして歴史意識をとらえようとしている。また同時に近年の思想史研究の批判的検討がなされ、そこに普遍的真實性による裁断と相対主義的視座の二つの方向をみだし、どちらも戦中の経験を問い続けるという遂行的なプロセスを中断させているとする。こうした中で考察の対象として提示されるのは、経験を問う中で形成されていった思想のネットワーク的な関係性であり、それを本論文では思想空間と名付けている。

一章から三章は、文学を通じて歴史への問いを探ろうとしている。まず一章では、武田泰淳『風媒花』とそれへの竹内好の批判をとりあげ、戦中体験を思想化しようとした武田の「政治小説」の試みと、こうした試みを失敗と断じ、徹底的に批判する竹内の批評の中で、歴史への問いが歴史記述を行なう歴史学ではなく、文学において構成されていくことを明らかにしている。次に二章では、堀田善衛の『上海にて』をはじめとする作品分析を通して、戦時期の上海体験と敗戦体験が堀田の戦後の文学活動を決定的に規定していることを示し、さらにアジア・アフリカ作家会議にみられる堀田の戦後におけるアジアや第三世界への積極的関与が戦中体験への内省的な問いとしてあることを明らかにしている。次に三章では、竹内好の60年安保闘争への参加と評論という立場を、竹内の戦時期における作品とかわらせながら検討し、「大東亜戦争」への参加を決意したという経験との対峙をくぐることのない歴史記述に対する激しい拒絶が、竹

内をして評論家としての立場を選択せしめ、また政治へのコミットメントを促したことを明らかにしている。第四章から六章は戦中体験から始まる歴史への問いが、具体的にどのような問題構成をもつのかということを検討している。まず四章では藤田省三の『天皇制国家の支配原理』をめぐる思想空間を具体的に考えることにより、藤田が丸山真男と唯物史観の両者から距離を置くなかで、鶴見俊輔や日高六郎、さらに谷川雁との関係が浮かび上がることを明らかにし、こうした展開をエリート主義からの脱却として位置づけ、それこそが藤田の天皇制批判の起点として確保されたとする。次に五章では、梅棹忠夫の戦時期の探検地理学、戦後における「思想の科学」研究会への参加を丁寧を追うことにより、「アマチュア思想家宣言」から『知的生産の技術』にむかう梅棹のプラグマティズムの系譜を積極的に評価し、そこに日常性から出発した戦中体験の思想化がみられることを明かにした。次に六章では、上原専禄の戦後における世界史の構想が、戦時期の「大東亜共栄圏の世界史的意義」から始まっていることを検討したうえで、こうした上原の戦中体験が内省的にとらえ直され、新たな歴史意識にむかう決定的な始まりとして、妻利子の死と日蓮への深い共鳴があることを明らかにしている。

以上の分析をふまえたうえで終章では、1950年代を中心とした歴史への問いが、武田の「政治小説」の失敗、堀田のアジアや第三世界への関与、竹内の評論という立場と安保闘争へのコミット、藤田の知識人批判、梅棹のプラグマティズム、上原における妻の死と日蓮への接近などにおいて星雲状に構成されており、こうした領域が史学史においては看過されていること、またこうした領域をネットワーク的な思想空間として問題化していくことこそが戦後思想の問題であることが提示されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が、従来の史学史からは看過される領域にこそ戦後思想における歴史への問いの源泉があることを、極めて具体的なテキストとテキストを取り巻く状況の検討から明らかにした点は、高く評価される。とりわけこうした歴史への問いという課題においては従来ほとんど省みられることのなかった、梅棹忠夫のプラグマティズムの系譜や、私事として片付けられていた上原専禄の妻の死を、戦中体験の思想化という点において論じ直したことは、極めて重要である。またこうした具体的作業の中で花森氏が構想する、戦後思想の別の源流とでも言うべき「思想空間」の発見という提起も、今後の戦後思想史研究の中で大きな意義を持つだろう。

他方、いくつか問題点も残る。まず第一に、「思想空間」という像を描こうとするあまり、既存の制度や集団、学問領域への内在的な検討が手薄であるという点である。たとえば堀田のアジアへの関与が戦時期の上海体験への内省的な問いとしてあったとしても、アジア・アフリカ作家会議での堀田の役割や行動は当時のソ連共産党、中国共産党、日本共産党を軸とした政治的構図の中で展開したのであり、こうした枠組みと花森氏が主張する「思想空間」がどのように関連し、具体的な軌轢を生みながら展開したのかという点が検討されていない。またかかる問題点は、本論文でいう「実践」という言葉の意味の不明確さにも関わっている。第二に文学や歴史学など様々なジャンルにおいて分類されていたテキストを歴史への問いとして再読するにあたり、花森氏はロラン・バルトのテキスト論に依拠しながら自らの新しい読みを確保しようとしているが、その際、従来の読みを規定していた作家論や学史への批判的な検討が不十分である。それ

はまた、本論文における引用文献の引用の偏りという問題にも関係している。第三に、説明のないまま登場する「消費社会化」、「グローバル化」という言葉についてである。それは個々の概念についての説明が不足しているという問題だけではなく、こうした大状況を規定する概念において「思想空間」の変遷を段階論的に定義すること自身が、本論文の意図を裏切る恐れがあるという点でも、問題である。

以上、本論文は、極めて野心的で、新たな思想史研究を開く論文である一方で、詰めていくべき問題も多々あるが、かかる点はこれからの研究における飛躍に向けての課題とも考えられる。よって本論文を、博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。

【2】

氏名	伊賀みどり
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第22425号
学位授与年月日	平成20年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	開業助産婦を通してみる出産文化の変容－「自然」と「医療」の間で－
論文審査委員	(主査) 教授 荻野 美穂 (副査) 教授 川村 邦光 准教授 北原 恵

論文内容の要旨

本論文は、昭和初期から現代までの開業助産婦の業務内容やあり方がどのように変化したかを明らかにすることを通して、日本における出産をめぐる文化の変容について考察することを目指したものである。具体的課題としては、(1)「自然」出産はどのようにして誕生し、その意味するものはいかに変化したか、(2)分娩における「正常」と「異常」の範囲はどのように定められ、助産婦はどの程度まで医療行為を行ったのか、(3)旧免許世代と新免許世代の助産婦ではどんな違いがあったのか、(4)産む女性たちはどのような意識で出産していたのか、(5)「産まない文化」に属する「貰い子」の斡旋や中絶、家族計画指導に助産婦はどのように関わったのか、および(6)授乳文化の変遷を明らかにすることがあげられている。全体は第1部と第2部に分けられ、第1部は主に文献資料に基づく歴史的考察、第2部は5人の助産婦に対するライフヒストリー・インタビューを中心に構成されている。序章において研究方法と課題を提示した後、第1部第1章では、本研究の出発点でもある某助産院で入院分娩した女性たちの残した記録をもとに、現代の女性たちが開業助産婦による出産に病院出産とは異なる「自然」さを求めていることが示される。

第2章は、明治から現代までの産婆・助産婦にかんする法制度と業務内容の変化を跡づける。旧制度の「産婆規則」下では産婆の業務は正常分娩の介助と定められていたものの、

実際には医師の立ち会いが不可能な場合に産婆が骨盤位や双胎のような異常分娩を扱うことも容認されていた。しかし1948年制定の「保健婦助産婦看護婦法」体制下では、異常分娩は医師の領分とする見方が強まる一方で、病院での帝王切開を避けるために骨盤位分娩を介助し、より「自然」な出産を標榜する助産婦も登場する。また優生保護法の下で家族計画指導が助産婦の新たな業務として登場した。

第3章では雑誌『主婦之友』の記事を用いて、産婆による自宅分娩の時代から戦後の病院・診療所出産へと移行していく中で、出産方法や妊産婦の出産観、および授乳の方法がどのように変化したかを考察する。帝王切開が増加する一方で、戦前にも戦後にも精神的無痛分娩の試みが行われていたこと、また「乳揉み」を専門とする人々が民間に多数存在し、母乳哺育のために重要な役割を担っていたことが明らかにされる。

第4章では、1960年代の病院・診療所出産の主流化とともに「計画分娩」に代表される分娩過程への医療介入が増加し、かつ母児別室のもとで粉ミルク育児が流行したことが指摘される。さらに続く第5章では、1970年代以降、こうした医療化された出産に対する批判が強まり、ラマーズ法出産や母乳育児の再評価、桶谷式乳房マッサージ、アクティブ・バース運動など、新たな「自然」出産の動きが広がっていく過程が叙述される。

第2部の冒頭の第6章は、ライフヒストリー・インタビューの方法、およびそこで聞き取った語りを文書化するうえでの留意点について述べている。

第7章と第8章は、旧制度下で資格をとり、戦前から戦後にかけて関西の某都市で開業してきた、年齢も経歴も異なる3人の助産婦のライフヒストリーである。それぞれの助産婦に対する多数回に及ぶ聞き取りを通じて、実際にどのように分娩を介助し、どのような医療行為を行ったのか、医師との関係はどうであったのか、哺育や乳揉みはどのように行われたのか、中絶や家族計画指導に助産婦はどのように関わったのか等々が、具体的に、かつ詳細に明らかにされている。

第9章は、新制度下で教育を受け、病院勤務を経て1980年代から90年代に開業した2人の助産婦のライフヒストリーである。彼女たちは、単に陣痛促進剤を使用しない、会陰切開をしないことだけを「自然」出産と考えるのではなく、出産する女性の食生活も含めたライフスタイル全体の自己管理を重視する点、および医療行為は避けて病院との協力関係を重視する点で、従来の助産婦とは異なることが明らかにされている。そして終章では最初の課題に即して、第1部、第2部を通して明らかになったことが整理されている。

論文審査の結果の要旨

近年、「自然出産」再評価の波に乗って元産婆や助産婦たちの評伝や聞き書きが多数出版されており、また出産にかかわる民俗学的・文化人類学的研究も少なくない。その中で本論文の持つ意義としては、まず、先行研究に見られるように1人の対象に焦点を絞るのではなく、世代も経歴も異なる5人の助産婦に対して丁寧な聞き取りを行い、それぞれのライフヒストリーの語りを比較対照することで、旧制度と新制度という時代的条件による助産婦業務の内容的変化を浮かび上がらせるとともに、ほぼ同世代であっても、助産婦ごとに業務に対する考え方や実践のあり方は多様であることを具体的に明らかにしたことがあげられる。

また、病院出産に対する批判からか、先行研究ではややもすると一切の医療介入を行わず、会陰保護に努めるなどの理想化された助産婦像が描かれる傾向が見られる。それに対して本論文においては、旧世代の助産婦はしばしば法的には認められていない陣痛促進剤